

小教区評議会役員交流会報告

■テーマ： サイクルテーマ①「共同体づくり」
「シノダリティをよく表す識別の方法「靈における会話」の体験」

■対象： ブロック担当司祭、協力司祭、宣教司牧協力者、小教区役員(各小教区2名まで)

■日時： 2025年10月11日（土） 11:00～16:00

■場所： 河原町カトリック会館大ホール 他

■参加人数： 40名（信徒34名、司祭6名）

■内容： 趣旨説明 「靈における会話」の体験 全体会

昨年に引き続き「靈における会話」の体験を目的に交流会を行った。「靈における会話」の説明と導入、昼食は短いながら交流の時間をもった。午後、まず参加者は分かち合いのテーマ「つながりの喜びを分かち合うために共同体として何ができるか」について個人で祈る時間を持った。その後、小グループに分かれ、ファシリテーターの進行のもと「祈りと沈黙」「聞くこと」「平等の発言時間」を大切し、聖靈の導きを願いながら分かち合いを行った。全体会では、第3ステップで一人一人の発言を付箋で貼りだしたシートとともにグループでの一致点や気づきなどが発表された。なお、ファシリテーターは、ヌヴェール愛徳修道会シスター、信徒カテキスタ、求道者に同伴する信徒の方々にご協力いただいた。

・大塚司教 講話 要旨

フランシスコ教皇が示す「靈における会話（Conversation in the Spirit）」は、単なる意見交換ではなく、祈りと沈黙の中で互いの声を聴き合い、聖靈の導きを識別して神の御心を共に見出すプロセスである。あえて「in the Spirit（靈において）」と強調されている点に意味がある。

教会は「神の御心が地上で実現しますように」と祈る共同体として、人間の知恵や多数決に頼らず、聖靈に導かれて決定していくことが求められる。そのために、役員一人ひとりが信仰の喜びを原動力に、希望をもって教会の未来を描く姿勢が大切である。

・一場神父 精神における会話のための導入 要旨

今日10月11日は第二バチカン公会議開会の日（1962年）であり、教会刷新の原点を思い起こす日である。「現代世界憲章」に示された「人々の喜びと苦悩は、キリストの弟子たちのものもある」という精神は、「共に歩む教会（シノドス）」の基礎にある。日本の教会もその精神を受け継ぎ、全国会議（ナイス）を通して「言葉や痛みを分かち合う生き方」を福音宣教の柱とした。現在のシノドスでは「靈における会話」を通して聖靈の導きを識別し合い、人の意見を超えて神の声を共に聴く歩みを続けている。「聖靈は確かな導き手であり、あらゆる人と出来事を通して語られる」（教皇フランシスコ）ことを司牧現場で経験している。聖靈に信頼して歩んでいくことを大切にしたい。

・参加者ふりかえり：別紙【ふりかえり一覧】参照

・福音宣教企画室ふりかえり：

「靈における会話」はシノドス的教会の識別方法として有効である。一方で参加者の理解にも温度差があり体験を重ねていくことが大切であると感じた。言葉のとらえ方や理解に違いがある中で誰にでも分かりやすいテーマ設定を心掛けたが、抽象的で分かりにくかったという声があったことは反省するところである。小教区やブロックでは「靈における会話」を会議のルールとして取り入れるよりも日頃のみことばの分かち合いなどで方法を取り入れ経験を重ねることで、自然に聖靈に聴く姿勢が身に付き、評議会、部会などで活かされていくと思われる。シチュエーションに応じてアレンジすることも大切にしながら、この識別方法が文化として定着するよう今後も企画を考えていきたい。